

[社 会]

# 未来社会を生きる当事者として、よりよい社会の在り方を主体的に思考する児童の育成

— 小学校第5学年「米づくりのさかんな地域」の実践を通して —

棚橋 幸平\*

## 1 はじめに

今、私たちの身近にある「当たり前」は、なぜあるのか。誰によって私たちにもたらされているのか。筆者は、児童と社会科の授業をしている中で考えることがある。しかし、これまで「当たり前」にあったものが「当たり前」ではなくなっている現状がある。昨今、AIや人工知能をはじめとする高度情報化社会、人口減少、少子高齢化の進行、地球規模の気候変動など、社会状況が変化し、先行きが見通せない予測困難な時代が到来していると言われる。児童は、これから先、誰もが経験したことのないさらに変化の激しい時代を生きていくことになるであろう。小学校学習指導要領解説社会編の目標(3)では、「社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、我が国の国土に対する愛情、我が国の産業の発展を願い我が国の将来を担う国民としての自覚を養う」とある。そこで、このような時代を生きる児童には、社会的事象について多角的な視点から社会状況の理解や問題把握をし、自分には何ができるか考えたり、自分なりの納得解を探したりする姿勢をもつことが大切であると考ええる。

しかし、国立教育政策研究所が行った令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査(小学校社会)によると、「社会に見られる課題を捉え、社会への関わり方を考えようとする」に課題があるという。本学級でも、知識として用語は知っていても、学んだことを基にして自分と社会との関わり方を考え、表現することを苦手とする児童が多い。

澤井(2015)は、日常であったはずのものが日常的でなくなっている現実をいかに感知して、そこに学習問題をつくっていくアプローチや未来志向型の課題解決を志向し、どのような未来を思い描くのかという「イメージ」を授業を通じて表現する必要性を指摘する。また、長瀬(2021)は、まちが抱える社会問題を追究・解決するための学習問題をつくり、学習者が自分と関わりのある地域に対して愛着や共感をもって、地域に関わる学びに参加し、提案することで地域社会への参加意欲も高めることができるとする「まちづくり的社会科」を提唱し、その有効性について述べている。

以上のことから、未来社会を生きる当事者として社会的事象を考察し、未来に向けた解決策を考え、提案するという学習過程を取り入れることにより、児童が社会的事象に関心を持ち、自分なりの解釈や判断をもって社会に働き掛けようとする姿勢を育むことができるのではないかと考えた。そこで、米づくりのさかんな地域の学習において、未来志向という要素を取り入れつつ、社会的事象に関わる生産者、消費者、販売業者の三者の立場から多角的に考察させ、獲得した知識を活用して表現、提案するという単元構成が児童の主体的な思考を促すことに有効であるか検証を行う。

## 2 研究の概要

### (1) 研究の目的

未来社会を生きる当事者として社会的事象を考察、追究し、これから先のよりよい社会の在り方を提案するという単元構成は、児童が生産者、消費者、販売業者の三者の立場から多角的に考えたり、学んだことを基にして自分と社会への関わり方を主体的に考えたりする力を高めることにつながるのか、実践を通して明らかにすることを目的とする。

そのために、次の三つの手立てを講じ、その有効性を検証する。

### (2) 研究の手立て

#### ① 児童の中にある社会問題を基につくる未来志向型の単元を貫く学習課題の設定

自身のこれまでの実践を振り返ると、児童に対して単元全体を通して追究意欲を持続させることに課題があった。現

\*長岡市立豊田小学校

在の社会問題について児童は生活経験の中で何かしらの情報をもっている。それらに対する児童の率直な意見を引き出し、「現状のままの米づくりでよいのか。」と問う。導入時に単元を貫く課題を設定することで単元を通して追究意欲を促せるようにする。単元の終末に10年後の米づくりの未来の姿を提案する活動を行うことを明示し、終末に向かって学びを主体的に進めようとする児童の姿をねらう。

### ② 三者の立場から多角的に考察した社会的事象について班で協働的に練り上げ、まとめる場の設定

複数の資料を読み取る際に、何について読み取ればいいのか、誰にとってのことなのか等、視点を明確に定めなかったことがこれまでの授業の課題としてあった。そこで、どの立場に立って考えればよいのかを明確にしたり、複数の資料を比較したりしながら、共通点や差異点について捉え、関連付けて思考できるようにする。黒板に立場を示した提示を意図的に行ったり、マトリクス表を活用したりすることで立場を明確にしたうえで思考させる。また、個人で読み取った社会的事象についての捉えを班で再度吟味したり改善策を考えたりする場を設定し、さらにその事象の意味や特色に対する理解を深めさせたい。それらを踏まえ、班で協働しながら10年後の米づくりの未来の姿についてを示したプレゼンテーション資料を作成させる。

### ③ 地域の生産者への提案を通し、自分と社会との関わり方について考えを深める場の設定

総合的な学習の時間で取り組んでいる学校田を支援して下さる地域の生産者がいる。児童は田植えで、昔の手作業と現代の機械作業の体験をした。また、学校田の草刈りを通して、田んぼを管理する難しさや厳しさを感じ取る機会もあった。農業に関する様々な社会問題に立ち向かい、未来を切り開こうとしている地域の生産者の姿を、児童は目の当たりにしている。その方に、単元の終末で行う児童の10年後の米づくりの未来の姿について聞いてもらう。そのうえで、生産者の立場として現在の農業に関する問題についてどう捉えているのか、それを改善するためにどのように取り組んでいるのか等、児童の発表に対する評価や意見、助言をもらう。また、生産者の描く未来図についても話してもらう。児童が、一緒に活動したことで身近に感じる生産者から話を聞くことで社会のリアルをより感じられるようにし、自分と社会との関わり方についての考えをより深められるようにしたい。

#### (3) 検証の方法

- ・社会的事象を多角的な視点から考察し、学習を基にして児童なりの改善に向けた考えやどのように社会問題に関わっていきたいのかを表現している抽出児童の記述の変容について確認する。
- ・学級の児童35名に対して事前、事後アンケートを実施する。割合による数値の増減を分析し変容を確認する。

## 3 実践の実際

### (1) 実施期間と対象、学校所在地

期間：令和7年6月～令和7年7月

対象：新潟県公立小学校第5学年児童35名

学校所在地：平成27年から始まった大規模な宅地開発により豊かな田園は数少なくなり、農家の数も減少した。また、当校に通う児童の自宅が農家である数も減少した。校区内には田んぼ、畑が残る一方で基幹病院、スーパーなどの施設も建設されるなど都市化が進み、農業は身近ではない児童も多い。

### (2) 単元名「米づくりのさかんな地域」

#### (3) 単元の目標

日本国内の米に関する社会問題や、人々の生活と米とのつながり、スマート農業や自然農法の特徴などを捉え、米づくりの未来の姿について考える。

#### (4) 単元を構想するにあたって

米の価格高騰、昨今の異常気象による収穫量の減少、といった報道は、児童にとっても生活の中で経験している身近な問題であり、消費者の視点で米に関する問題を捉えている。そのため、「価格は安いほどいい。」や「スーパーにお米がなかった。」などといった会話をしていた。これらの児童の実態を踏まえ、生産者、販売業者の視点からも考察させることで、複雑な要因が絡み合う米に関する問題を捉えさせたいと考えた。単元の導入で児童にとっての米に関する意識、現在の社会問題について捉えたうえで、単元を貫く学習課題として「日本の米づくりは10年後どのような姿になっているとよいか。」と設定する。10年後と設定した意図は二点ある。一点目は、児童が成人を迎え、社会参画する時期だからである。二点目は、長岡技術科学大学が中心となり、新潟県の農家や企業、研究機関、自治体などと連携して進

められている「田んぼの地カラ，ミライへ“コメどころ”新潟地域共創による資源完全循環型バイオコミュニティ拠点」プロジェクトが持続可能な米づくりの実現に向けた10年後の未来像を示しているからである。プロジェクトは、目指す10年後の未来像として「儲かる農業」「若者に魅力的な農業」「産業間の共創」「新産業の創出」の四点を挙げている。この未来像は生産者と児童をつなぎ、思考する際の架け橋になるのではないかと考えた。そして、終末にこれまで学習してきた知識を総合し、10年後の米づくりの未来の姿について地域の生産者に提案するという単元を構想した。

#### (5) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
米づくりに携わる人たちは、生産性や品質を高めるために努力したり輸送、販売の工夫をしたりして食料生産を支えていることを理解している。	米づくりに関わる問題について学習したことを基に生産者や消費者、販売業者の立場から多角的に考察し、考えをまとめ提案している。	米づくりに関わる問題について学習問題を追究し、生産者や消費者、販売業者の立場から、未来の姿を描こうとしている。

#### (6) 単元の指導計画（全10時間）

次	時数	◎追究課題	□学習活動
1	1	◎日本人にとって米とはどのようなものか。	□私たちが米のつながりについて考える。
	2	◎現在、日本の米づくりにはどのような問題があるのだろうか。	□現在、起きている社会問題や各資料を読み取り、日本の米づくりについて捉え、単元を貫く学習課題を設定する。
単元を貫く学習課題：日本の米づくりは10年後どのような姿になっているとよいか。			
2	3	◎日本のどこでどのような品種の米をつくっているのか。	□日本全国で米づくりは行われ、自然条件に合わせた品種がつけられていることについて調べる。
	4	◎現在の日本の米づくりはどのように変わってきたのか。	□1年間の米づくりカレンダーを作成する。 □耕地整理、水路整備、機械化により作業時間が減少したことについて調べる。
	5	◎米づくりには誰がどのように関わっているのか。	□消費者に米が届くまでには多くの人が関わっていることを知り、調べる。
	6	◎スマート農業やAI、ロボットを使った米づくりはどのようなよさがあるのか。	□スマート農業の導入による生産者と労働時間との関係について考える。
	7	◎なぜ、自然農法や環境保全米の栽培は行われているのだろうか。	□長岡市の環境保全米ブランドとして誕生した特別栽培米「小さな生き物たちと育むお米」を基に、自然農法が行われる理由について考える。
3	8	◎日本の米づくりは10年後どのような姿になっているとよいか、提案する準備をしよう。	□これまでの学習を基に、日本の米づくりは10年後どのような姿になっているとよいか、チームで考え、プレゼン資料を作成する。
	9		
	10	◎これまでに学習してきたことを根拠にし、日本の米づくりは10年後どのような姿になっているとよいか、地域の生産者に提案しよう。	□地域の生産者に10年後の米づくりの未来の姿についてプレゼンするとともに、生産者の思いについて聞き、未来の米づくりについて考える。

#### (7) 手立ての実際

##### 【手立て① 児童の中にある社会問題を基につくる未来志向型の単元を貫く問いの設定】

第1次、第1時では日本人にとって米とはどのようなものであるか率直に意見を出させた。米とは何かを問うと、A児は「宝物！」と答えた。他にも「毎日食べる。」や「ごはんに合うおかずとの組み合わせは最高。」など自分自身の中にある米についての率直な思いが出た。また、「店に売っていなかった。」「最近、米不足でお米が高い。」や「備蓄米を買った。」など時事に関して生活経験の中で捉えていることが伺える児童も複数いた。児童から出た意見は自分自身の視点からの意見が大多数であった。生産者の視点に立たせるため、「なぜ、米は高くなったり、不足していたりするのか。」と問い返した。「農家の人たちが大変だから。」や「農家の人たちはたくさん作りたいけれど温暖化で採れなくなっていると思う。」といった意見が出た。意見を整理していきながら黒板にまとめていった。また、昔の人の視点で意見を出す児童もいた。「昔はもっと田んぼが多かったからたくさん採れたと思う。」や「昔はパンとかないからもっと安かった。」といった意見も挙がった。終末には、米はいつの時代も人間にとってなくてはならないものということを経験で共有した。第2時では、資料の読み取りを通して米づくりの問題点を捉え、学級で共有した。提示した資料は次の四種類である。①米の生産量と消費量の変化、②農業で働く人の数の変化、③耕作放棄地の推移、④農作業にかかる時間の増加の資料を読み取り、現在どのような問題があるのかを考えた。①について、生産量は年々減っており、安定して米が採れなくなっていることや消費量も減ってきていることを確認した。②について、生産者の高齢化が進んでいることや生産者が減ってきている現状について把握し、生産量が減る要因になるのではないかと読み取った。③について、耕作放棄地が増加していることにより、収穫量が減っているのではないかと捉えた。一方、④について、農作業にかかる時間は大幅に短縮されていることを読み取り、機械による作業が増えたからではないかと予想をした。最後に現

と10年後の人口ピラミッドを比較し、人口減少、少子高齢化が進行することを捉えた。「現状のままの米づくりでいいのか」と問うと、児童からは「よくない。」「変えていかないといけない。」といった意見が挙がった。そして、単元を貫く課題として「日本の米づくりは10年後どのような姿になっているとよいか。」と設定し、追究していくことを確認した。授業後には、「全部機械がしていると思う。」や「もっと大量に採れるような米の品種ができている。」などの発言が聞かれ、これから追究していこうという意識を高めた児童の姿が見られた。

【② 三者の立場から多角的に考察した社会的事象について、班で協働的に練り上げ、まとめる場の設定】

第2次から、課題について追究した。第3～5時では、おいしいお米を食べられる理由について考えた。各地の自然条件を生かして品種が開発されていることやカレンダー作りを通して、米を収穫するまでにどのような作業があるのかを確認した。また、昔と現在の米づくりの変化した点についてや米づくりにはどのような人たちが関わっているのかについても捉えた。これらの課題について考える際に生産者、消費者、販売業者の三者の立場があることを確認し、板書やワークシートに意識して提示するようにした(写真1)。これにより、誰がどのような仕事をしているのか、つながりを見い出して考えたり、主語を明確にして読み取ったりしようとする姿が見られた。第6、7時では、AIやロボットを使った米づくりについてや、自然農法、環境保全米の栽培が行われている理由について追究した。AIやロボットを使った米づくり、スマート農業は広大な土地を管理するときに労働力を補ってくれたり、生産効率を上げたりしていることを捉えた。また、環境に配慮した米についても三者の立場になって考えた。長岡市の新たな環境保全米ブランドについても取り上げた。誕生した経緯について生産者の立場で考えた際、生産者は農薬を使わないことは手間がかかる作業かもしれないが、おいしいお米を提供できることや環境を守りたいと思う気持ちがあるからではないかと考察していた。消費者にとっては、安全安心でおいしいお米が食べられる、販売業者にとってもこだわりをもって作った大切なお米だから魅力を発信していくことで高い価格だとしても買ってもらえるのではないかと三者の立場から多角的に考えようとする姿が見られた。

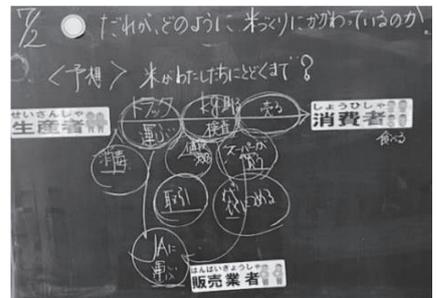


写真1 関わる3者の視点提示(第5時)

第3次では、第2次までの学習を踏まえて、班で協働しながら10年後の米づくりの未来の姿についてプレゼンテーション資料にまとめる時間とした。班のメンバーで再度これまでの学習で扱ってきた社会的事象についてマトリクス表を用い多面的・多角的に捉えさせることとした。マトリクス表の項目として第2時で読み取った現在の米づくりの問題点を設定し、さらに追究させることとした。その他、各班で項目を設定し、問題点について整理しながら表にまとめさせるようにした。また、「田んぼの地カラ、ミライへ“コメどころ”新潟地域共創による資源完全循環型バイオコミュニティ拠点」プロジェクトの描く10年



写真2 マトリクス表を用いた班での話し合い

項目	懸念点	せいさんしゃ 生産者	しょうひしゃ 消費者	はんばいぎょうしゃ 販売業者
生産	減っている	異常気象→育たない 高れい化 エサも利用が変わる 〇品種改良	米不足 高い米	米が高い 米が売れない
消費	へっている		高れいがない→安い方が行く(米を買わない)	・しょうひ者が米買わない ・米売れない 〇外国などの安い米が売れる
米農家の年齢	60以上が大半(こうれい者)	人手不足 このままだと農家がなくなる...?	つながる(同じ)	・米が売れない(農家いなくて)
全体の農業人口	へっている	今のままだと農家がなくなり米がなくなる	・新米、日本米が食べられなくなる	・米がこない →新米、日本の米がなくなる

写真3 児童が思考する際に活用したマトリクス表

後の姿についても提示した。複数の人数で話し合うことにより自分では気付かなかった新たな見方で問題点を捉えようとしていた。児童は、本時までの学習でまとめたワークシートやタブレットを見せ合いながら説明し、マトリクス表を活用して米づくりに関する問題点の共通点や改善に向けた策について話し合う姿が見られた。班でこれまでの学習をさらに練り上げ、マトリクス表を活用して社会的事象を整理しながら、タブレットで協働してプレゼンテーション資料を作成する姿が見られた（写真2, 3）。

### 【③ 地域の生産者への提案を通し、自分と社会との関わり方について考えを深める場の設定】

第3次、第10時に地域の生産者に「日本の米づくりは10年後どのような姿になっているとよいか。」を提案する場を設定した。児童は、単元を通して学習してきた米づくりの問題点について三者の視点に立って整理しながらプレゼンテーション資料を作成してきた。各班は5～6人で編成し、全6班が提案を発表した。発表内容の概要は以下の通りである。

資料1 各班の提案概要

班	生産者	消費者	販売業者	三者全体
1	もっと生産者が増え、生産者の苦勞が減ってほしい。	積極的にお米を食べる、消費する社会にしていこう。	生産者と協力しながら米を消費者へ届ける。	農業を三者が身近に感じられるようになっていく。
2	生産者の高齢化に対応したスマート農業が広がってほしい。	購入しやすい価格になってほしい。	収入が安定し、儲かる販売ができるようになる。	三者が納得する価格帯を探していくことが必要だ。
3	異常気象への対策、後継者を増やす取組をしてほしい。	このままだと主食がなくなることになる。消費量を上げていこう。	おいしい銘柄米を買ってもらえるように販売方法をPRする。	三者が嬉しい方法で米を未来に残す方法を考えていく。
4	積極的にスマート農業を取り入れてほしい。	生産者がいなくなると米を食べられなくなるという危機感をもつ。	家庭栽培をする仕組みを整え、取り入れていけばよいのではないかな。	三者が未来も米を安定して食べられるような取り組みをする。
5	自由競争によってライバルが増えたので、イベントで魅力を伝えていくことが必要だ。	米離れが進んでいるから消費量を上げていこう。	もっと関わる生産者の事情も含め、価格を上げていきたい。	みんなが納得する値段になって三者が困らないようにする。
6	安定して生産できるよう、品種改良をさらに進めていきたい。	新米やブランド米を積極的に買っていき意識をもつ。	米を安定して消費者に販売できるようにする。	三者がつながって持続可能な生産体制をつくっていく。

児童は、三者の視点に立って社会問題についての現状を踏まえ、どのような未来になっていけばよいか各班で提案を行った。マトリクス表でまとめたことから生産量、消費量についての問題を基にして、考えようとする班が多かった。また、今の生産体制について見直したり、生産者を支えたりすることについてもアプローチして考えた班の提案が見られた。三者のそれぞれの視点や三者全体の視点からの提案は、いずれも未来に向けた児童なりの捉えが表現されていた。消費者としての自分の立場だけでなく米づくりに関わる全ての人たちを包含したうえで、よりよい社会の在り方についての未来を描いていた。

提案後、地域の生産者から現在の農業に対する考えや実現してほしい未来の姿について話してもらった。一人目の生産者からは、「農業は重労働であるということを理解してもらいたい。」という話があった。「高齢になると重いものは持てなくなることから、資材の袋の規格が小さくなってほしい。」という声もあった。また、「スマート農業という話が簡単に出るが、扱うには勉強して操作方法を習得する必要があるため、扱いやすい機械が開発されてほしい。」という話もあった。さらに、価格帯に関する話もあった。「生産者としては、米をつくるための資材費が安くなることで、消費者に提供する米も安くなるといい。」という未来への展望を話してもらった。二人目の生産者からは、実行することの大切さについてであった。「これから自分が他者に何ができるのか学習したことを実行に移して行ってほしい。」という言葉ももらった。「納得できる価格は簡単には決まらない。それぞれの思いがあり、生活がかかっているという現状を踏まえつつ、それぞれの立場の人の話を否定しないで聞くことが大切である。」という生産者の思いについて何うことができた。児童は、自分が行った提案と生産者の話を重ね合わせ、自分と社会への関わり方についてさらに追究しようとする様子が見られた。



写真4 生産者の思いに触れる児童

## 4 研究の考察

### (1) 抽出児の記述から

資料2 抽出児童の記述（資料3本単元前アンケートの全質問項目に対し、いずれも1と回答した児童3名を抽出した。）

	第2次（第1～7時）までを終えての振り返り記述	本単元を終えての振り返り記述
児童A	人手不足を解消するためにスマート農業を増やすのもいいと思います。ただ、それだとお金がかかたりするから農家の人たちは大変だと思いました。農家の人達の収入が増えるように協力すればいいと思います。	はくは、提案をして、改めてお米の大切さ、農家の大切さを感じました。具体的には、今は米が高くて買えない、農家も少ない。だから、農家に日頃から感謝し残すことがないようお米、地域を大切にしていきたいです。お話をいただいたとおり、発表だけでなく実行もしていきたいです。それをたくされた僕は残さず美味しく食べたい、今のことをいろんな人に発信したいです。
児童B	作業の短縮するために機械の利用をもっとすればいいと思います。自然を使って、農業をあまり使わない安全なお米をもっと広めていくことも必要だと思います。	生産者・消費者・販売業者みんなが納得する値段にするとよいと提案では考えました。話を聞いて、生産者・消費者・販売業者が納得する値段は簡単ではないと思いました。最後の話を聞いた時、「この勉強をして、みんなの心のそこから、『米』についての気持ちが変わっているのか？」と聞かれました。私は、これからもお米を残さずに、一粒一粒を大切に食べていきたいです。
児童C	生産者の人たちががんばっているのに米が安いのはかわいそうだと思いました。もっと機械を使うことでたくさんとれるようになってほしいし、楽になってほしいです。	私は、提案をしてお米は未来に残すべきだと思いました。なぜかという日本食文化の1つだし、主食でもあるからです。高齢化が進むとよくないけれど、生産者はスマート農業がめっちゃいいというわけでもないのだなと思いました。おいしいお米を未来に残すために、私は、若い人がたくさん仕事にしろというにはどうすればよいかこれから考えていきたいです。

第2次までを終えての振り返りには、下線の通り、生産者の視点からの記述が多かった。一方、単元末の振り返りには、三者の立場から多角的に思考し記述をしていた。また、記述量も増加した。生産者への感謝や現状を踏まえながら自分にできることや意識の変化についても記述していた。三者の立場から多角的に考えたことで米に関する意識の変化を生み、自分と社会とのつながりを感じさせることができたからではないかと考える。

### (2) 単元の事前事後アンケートにおける数値から

資料3 社会科学習に関する児童への質問（対象児童：男子19人 女子16人 計35人） 4（とてもできた）3（できた）2（あまりできない）1（できない）	本単元前		本単元後	
	肯定的評価	否定的評価	肯定的評価	否定的評価
①調べたことを基に、自分の考えをワークシートやタブレット端末に書くことはできましたか。	68.6%	31.4%	82.9%	17.1%
②学んだことを基に、世の中の出来事をさらに知るようになり、情報を集めたりできましたか。	71.4%	28.6%	77.1%	22.9%
③地域で働く人の話を聞いてこれからの自分に生かせることはないかと考えることはできましたか。	65.7%	34.3%	80.0%	20.0%
④自分の将来にも関係のある問題として自分にできることはないかと考えることはできましたか。	71.4%	28.6%	82.9%	17.1%

項目①から、学んだことを基にして自分の考えを主体的に表出しようとする児童が増えたことが伺える。単元を貫く課題を設定し、終末を見通した学びを進めたことが要因であると考え。項目③、④の肯定的評価の数値は上昇が見られた。地域の生産者から話を聞いたことで、これまで追究してきたことを振り返り、自分の米に関する意識の変化や思いを見つめ直すよい機会となった。また、本単元構成によって自分事として、未来社会を生きる当事者として、社会に主体的に関わっていこうという意識を米づくりから醸成させることができたと考え。一方、項目②は微増であったことから、扱う資料が多くなったことで適切な情報を集めることは、児童に難しさを感じさせてしまったとも推察する。

### (3) 今後の課題

実践を通して、児童は未来社会を生きる当事者として現状の問題点を認識し、10年後の米づくりの未来の姿を三者の立場から多角的に思考した。しかし、三者の中でも販売業者の視点からの思考を十分にさせることができなかったことが課題である。販売業に携わる方の話を聞く場を設けるなど、より多角的に思考できるようにする必要があったと考え。今後の実践においても、「当たり前」にあるものは関わる多様な人たちの努力の上に成り立っていることについて認識させ、児童が社会との関わり方について主体的に思考することができる授業展開を模索していきたい。

## 5 引用・参考文献

- 国立教育政策研究所「令和4年度学習指導要領実施状況調査教科等別分析と改善点（小学校社会）」、2025年、pp.6-7  
 国立教育政策研究所ホームページ[https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shido\\_r04/](https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shido_r04/)、（参照2025-09-25）  
 澤井陽介『澤井陽介の社会科の授業デザイン』東洋館出版社、2015年、pp.34-39  
 長岡技術科学大学COI-NEXT拠点運営機構「田んぼの地カラ、ミライへ“コメどころ”新潟 地域共創による資源完全循環型バイオコミュニティ拠点」<https://coi-next.nagaokaut.ac.jp/>、（参照2025-9-25）  
 長瀬拓也『社会科でまちを育てる』東洋館出版社、2021年、pp.42-46  
 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版、2018年、pp.10-11